

## 日常異変 コロナの私(8)

### コロナ禍に思った生きる意味と価値

#### 時間たっぷり自宅待機の毎日

普段、アートアドバイザーとして、主にデパートの展示会で絵画販売を生業としていたのですが、4月の緊急事態宣言が発せられてから、全国のデパートは自粛として、食料品売り場以外は休業となってしまいました。5月26日に宣言が解除され、地方のデパートは開業に向いましたが、首都圏はこれから本格的な開業へと向かいます。

デパートは社員も何百人、何千人とかかえる大所帯で、社員以外にも派遣や、店舗社員として出向している数多くの働く人たちがいて、それらのほぼすべてが1ヶ月以上も休業してきたというのは、考えてみると大変なことでした。

政府の方針に従い、百貨店業界は足並みをそろえましたが、東京都が保証する休業補償の200万円などは、人件費、光熱費等考えただけでも1日の売りにきに遠く及ばないでしょう。

そして私も、私の所属する会社も、デパートを主な卸先としているため、デパート休業と同時に全く仕事ができなくなり、ずっと自宅待機の毎日です。

4月の18日ごろから公園のウォーキングとスーパーでの買物以外は、ほぼ自宅にいて、仕事柄テレワーク等もできないため、ずっと休暇状態です。

こんなに長い休暇は久しぶりだなあ・・と思いつつ、そういえばかつてフランスに住んでいた時、フランス人と共に過ごしたバカンスのことを思い出しました。

#### フランスのバカンス事情を思い出す

フランスは当時、週35時間労働、有給休暇が5週間、というのがスタンダードだったため、エグゼクティブ以外はその枠組みで働いていて、週5日間の7時間労働で就業時間ぴったり(時には10分前)に終り、私の知る全員が、5週間の有給を全部取っていました。

夏になると6月後半から9月前半にかけて1ヶ月以上の休みをほぼ全員が取ることになり、その間店舗も閉めてしまったり、人員も著しく減って、労働力もサービスもかなり低下します。

フランスでは1936年に「congés payés」という有給休暇法が成立し、労働者に2週間の有給休暇を与えることが決まって以来、延々と100年近くも長期の休暇を取る習慣が身についています。誰もが感じるバカンス中の多少の不便は、自分も休暇をたっぷり取るためには大目にみるところがあります。

さて日本では、ご承知の通り最近でこそ働き方改革が叫ばれ、残業が減りつつあるとはいうものの、有給消化率はみなさんの周りでも、かなり低いと思われます。

フランス人のように、2週間とか1ヶ月とかの休暇をまとめてとったことのある日本人労働者は、非常に少ないのではないのでしょうか。



### イライラ派と楽しむ派と

今回の事態で気が付いたことは、たとえばデパート勤務者のように自宅待機を強いられてテレワークも不可能な人たちは、強制的にフランスの長期バカンスのような状態が強いられているように見えたことです。外に出て海辺で遊んだりはできませんが、少なくとも自分の好きなことを家でやることはできます。

Stay Home のこの期間、SNS を通じて友人たちの動向をいろいろと観察していて、外に出られなくてイライラしている人たちの群と、ぜんぜん困らず結構楽しんでいる群、の2つがあるように思えました。

それは、個々人の趣味の方向性にもよると思えますが、友人とおしゃべりして、観劇や外食やショッピングが主な楽しみ、という人たちの打撃は大きく、楽しみのほとんどが奪われてしまうためにかなり落ち込んだり、イライラしたりしているようです。

かたや、ある意味オタクと言われるような趣味を持つ人たち、読書や Netflix などで映画やドラマ観賞を好む人(私です)や、ゲーム愛好者、大人のぬり絵に興じる人たち・・・などは、この Stay Home を、あまり苦にすることもなく、むしろ楽しんでいるようにも思えます。

さらにすごいと思ったのが、研究者やアーティストといった、一芸に秀でる人たち。彼らは、自分の研究論文のテーマを極めたり、絵を描いたり、歌を歌ったり、作曲をしたりすることに時間を忘れて没頭しているため、普段の雑音の多い生活よりも、深く集中できているように見受けられまし

た。

日本の労働者は、夏休みが多くても1~2週間、冬休みはお休みでも帰省や年中行事があつたりして、ぼーっと何週間も好きに過ごせる時間を確保する機会は、これまでほとんどなかったのではないのでしょうか。

### スーパーの売り場からみた世情

経験上、長期休暇の最初の1週間は、それまでできなかったいろいろな用事に忙殺されて、あまりゆっくりできません。2週間目くらいから、さあ、何をやろうかな、という気分になってきます。

今回もとても面白いと思ったのは、緊急事態宣言が発せられる直前くらいから、スーパーの冷凍食品、カップ麺、サケの切り身などが一斉になくなりましたが、その後2週間くらい後になって落ち着いてきたところに、今度は小麦粉やバター、ゼラチンやベーキングパウダーなどが棚から消えました。

最初は、子供や家族の食事の用意に手いっぱい、すぐに準備できそうな食品が買われましたが、その後リズムを取り戻した後に、今度はこれまでできなかった本格的なお菓子作りなどに使う材料類が求められたのだと思います。

この Stay Home の経験は、間違いなく災禍が原因ではありますが、これまで物事の進むペースがかなり早く、せっかちだと言われてきた日本人がスローライフを身に着ける、いいきっかけになるかもしれません。また、ずっと外向きの趣味にしか関心がなかった人たちにも、じっと内省して、新しい自分を知るための契機にもなりうると思います。

### 人の生き方を考えさせた微小生命体

アップルの創設者スティーブ・ジョブズは、56歳の時に癌で亡くなりましたが、彼の iPad に一つだけ残されていた電子書籍は、『あるヨギの自叙伝』（パラマハンサ・ヨガナンダ著）だったといいます。若い頃、大学を中退してインドを放浪した経験もあるジョブズは、末期ガンの最後の希望として、この奇跡に溢れた本に救いを求めたのかもしれません。Mac や iPhone で得た巨万の富でも命が買えないことに気づいて、最後の時期には瞑想の時間を多く持ったそうです。

世の中には、1年で何百億もの報酬を手にする CEO もいますが、かたや飢えて死ぬ人たちも沢山います。小さい頃、人が働いたり科学を進歩させたりするのは、人間がもっと安楽に自由に生きられるようになるためだと思っていましたが、世界はいまだにそうはなっていないようです。さまざまなところに偏りが生れ争いが起こり、そのバランスの乱れがひいては災害や戦禍にも発展しているようにも思えます。

人の幸せはそれぞれなので、自分の趣味や考えを人に押しつけるわけにはいきません。

しかし、それぞれが自分にとって本当に幸せだ、と思えるもののために、きちんと時間とお金を使っているかをもう一度考えることのできる、いい機会でもあるのではないのでしょうか。

地球上でもっとも微小な生命体であるコロナウイルスは、私たち一人ひとりに、世界と人生についての内省をうながしているように思えます。

矢崎千絵